

## イタリア中部地震における心理社会的支援

齋藤 和樹<sup>1)</sup> 前田 潤<sup>2)</sup>

### On psychosocial support at the central Italian earthquake

Kazuki SAITO, Jun MAEDA

**要旨：**2009年4月6日早朝に発生したイタリア中部地震後のイタリア赤十字社（IRCS）およびラクイラ大学で行っている心理社会的支援について、現地視察調査を行った。IRCSでは、国際赤十字赤新月社連盟（IFRC）の心理社会的支援プログラムとは別の独自の心理社会的ケアを行っていた。それらのいくつかは、「ユーモア」に基づいたものであり、「ドクトル・クラウン」という存在もあった。IRCSの心理社会的支援は、災害の生存者に対してのみならず、救援者に対しても行われていた。IFRCには、心理社会的支援のための十分な資器材がそろっていた。ラクイラ大学が行っていたサバイバーの精神的健康に関する調査には、グローバルスタンダードになっているGHQやIES-Rなどが含まれていた。

**キーワード：**心理社会的支援、イタリア中部地震、ラクイラ、赤十字

**Summary：**We researched on a psychosocial support that was provided by Italian Red Cross Society (IRCS) and L'Aquila University at L'Aquila after the central Italian earthquake had occurred on April 6th in 2009. The IRCS did not use the psychosocial support program (PSP) which was made by the International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies (IFRC), but instead the IRCS used their own psychosocial support methods. Some of them are based on the use of humor such as "doctor clown." The IRCS provided psychosocial support not only for the survivors of the disaster but also for the aid workers. The IRCS also has enough material for psychosocial the support. The survey on the survivors' mental health by L'Aquila University includes global standard questionnaires such as GHQ and IES-R.

**Key words：** psychosocial support, central Italian earthquake, L'Aquila, Red Cross

#### I. はじめに

2009年4月6日午前3時30分頃（現地時間）ローマの北東約100kmの所にあるアブルッツォ（Abruzzo）州ラクイラ（L'Aquila）県ラクイラ市（人口約68,000人）付近を震源地とするマグニチュード6.3、震源の深さ約10kmの地震が発生した。この災害により、284名の死者、1,500名以上の負傷者、40,000人以上の人が家を失うという被害を出したといわれている（防災システム研究所、2009）。この地震被害は、「イタリア中部地震」あ

るいは「ラクイラ地震」と呼ばれるが、本稿では日本の報道に従って「イタリア中部地震」と呼ぶ。

この地震被害に対して、イタリア政府およびイタリア赤十字社（IRCS）は、復興に関する経済的な支援は別にしてレスキューや医療救援、心理社会的支援に関しての国外の人的支援を求めなかったために、日本赤十字社（JRC S）を含む各国の赤十字社およびNGO/NPOの救援チームは派遣されることはなかった。そのため、そこでの心理社会的支援がどのようなものであるのか

1) 看護学科 准教授 2) 室蘭工業大学大学院工学研究科ひと文化領域/環境科学防災研究センター 准教授  
この調査は、科学研究費基盤研究A「災害時における効果的心理的支援のための連携協力に関する研究」の研究費助成を受けている。論文の要旨の一部は、第45回日本赤十字医学会総会で発表された。利益相反はない。

の情報は乏しい。筆者たちは、I R C Sの協力のもと、研究者として現地に入り、心理社会的支援活動の視察をすることができた。イタリア中部地震での心理社会的支援活動に関する研究者からの報告はほとんどないので、ここで筆者たちの見聞を報告することの意義は大きいと思われる。

## II. 目的

イタリア中部地震後にI R C Sおよびその他の組織によって、どのような心理社会的支援活動が行われているのかを視察調査することを目的とする。

## III. 研究方法

2009年5月9日、10日、12日の3日間、現地の避難所やI R C Sのベースキャンプ等を視察するとともに、心理社会的支援を行っているI R C Sのスタッフとボランティア、ラクイラ大学医学部精神科の教員たちに非構成的面接による聞き取り調査を行った。その際には、国際赤十字・赤新月社連盟（I F R C）の心理社会的支援プログラム（P S P）の視点を用いるようにした。

## IV. 結果

2009年5月8日秋田（前田は札幌）を発ち、成田空港経由でローマに到着した。被災地のラクイラ市のホテルは宿泊が困難なため、ローマ市内にホテルを確保し、ローマからは高速バスで1時間半ほどかけラクイラに通った。ラクイラでは運転手付きレンタカーを借り上げ、被災地および避難所等を回った。アブルッツォ州の中でもラクイラは、観光と大学の町といわれ、2,000m級の山に囲まれた風光明媚な山間地域であり、総合大学のラクイラ大学の各学部が、分散している地域である。

5月9日にラクイラを訪れた。ラクイラでは、歴史的価値のある古い建築物が多い市街地の被害が大きく、建物の崩壊等で15名の死者を出しているため、中心部の入口に警備がついて閉鎖されており、市街地に入って視察調査することはできなかった。そこで、郊外の①サンベネット（San Benetto）、②アッチアーノ（Acciano）、③ロッカプレトゥロ（Roccapreturo）、④ベッフィ（Beffi）、⑤スッチアーノ（Succiano）、⑥オンナ（Onna）、⑦アッソルジー（Assorgi）、および⑧ラクイラ大学グラウンドにそれぞれ設置された避難所（テント

村）や被災状況を視察した。

事前調査で、I R C Sは、シビルプロテクション（civil protection／イタリア内務省管轄の組織）と協力して救護にあたっているとの情報を得ていたが、現地では、シビルプロテクションが配布した統一規格の青いテントが目立った（図1）。その数はかなりのものであった。しかし、山間部では自主的な避難なのかシビルプロテクションとは違うテントも散見された。



図1 シビルプロテクション提供のテントによる避難所

オンナでは、建物の50%が崩壊し、アルテノ＝ベスカラ川に架かる橋も被害を受けており、43名が死亡するという大きな被害を出したので、その入口は、森林警察によって警備されており、村落に入ることはもちろん周囲の写真撮影も禁止されていた。

5月10日にI R C Sのベースキャンプを訪問した。多忙にもかかわらずI R C Sスタッフは、10日、12日と2日間筆者たちを受け入れてくれ、心理学の博士号を取得しているArianna Marchetti博士が、私たちの調査のためのスケジュールを組み、相手先との交渉も済ませておいてくれた。この3日間は、どこへ行くにもI R C Sのスタッフが同行してくれたが、彼らの車両のナンバーは、一目でI R C Sの車両とわかるようにナンバープレートは、赤い文字で「C R I」（イタリア語でイタリア赤十字社を意味する略語）で始まっていた。Marchetti博士は、ボランティアでI R C Sのベースキャンプ内のテント（これらもシビルプロテクションの青いテントであった）に1か月ほど寝泊りして支援にあたっているI R C Sアブルッツォ州ラクイラ支部のユース（J R C Sの赤十字学生奉仕団に相当すると思われる）のリーダー

一格的存在であった。ラクイラは、山岳地帯にあるため日中の気温は摂氏18度くらいあるが、夜間は5度以下までに冷え込むため、テント生活は快適な居住環境とはいえず、イタリア全土から集まった救援者たちにもストレスを与えているようであった。Marchetti博士自身は地元在住で、被災者でもあり救援者でもあるという立場であった。彼女は、疲労からか気管支系の症状を呈しており、体調は万全とはいえない様子であった。

Marchetti博士の話によると、I R C Sの心理社会的支援を行っているのは、研修を受けたボランティアと精神医学や心理学の専門家であるということであった。ボランティアに話を聞くとP S Pを知らない人が多かった。Marchetti博士は、P S Pを知っていたが、I R C Sには、独自の心理社会的支援の研修コースがあるという。ボランティアは、いつでも活動できるようにして、普段は小さな事件等で活動しているとのことであった。したがって、今回の地震でも発災日から活動を開始できたという。

ベースキャンプを案内してくれたのは、ベースキャンプ責任者のRoberto Baldessarelli氏である。彼は北イタリアの出身で、発災直後からラクイラに入り活動しているとのことであった。ベースキャンプでは、救援者のための心理社会的ケアにも配慮されていた。まず、食堂ではレストランのシェフによる料理が本格的な厨房で作られており、暖かくておいしい食事がとれるようになっていた。また、シャワー専用の車両(図2)があり、男女



図2 I R C Sベースキャンプ内のシャワー車両

別に同時に複数のスタッフがシャワーを使用することができていた。トイレはもちろん水洗であった。ユニークだったのは、イタリア各地から救援



図3 I R C Sベースキャンプ内の「瞬間移動装置」

に入っているスタッフが望郷の念にかられた時に使用するという「瞬間移動装置」(図3)であった。これは、遊び心で作ったもので、もちろん物理的に瞬間移動をさせることはできないただの木箱(おそらく何かの物資を運んだ空箱)なのだが、そこに入って自分の行きたい場所を書き、行った気分になるというものである。そこには、びっしりと地名が書かれていてよく利用されていることがわかった。「面白いアイデアだ」と伝えると、次の訪問時にはもう一つの「瞬間移動装置」ができていた。I R C Sでは、J R C Sでは行わない衣類や日用雑貨、食糧などの寄付を受け付けており、それらを貯蔵管理しているテントもあった。そこには担当者が付いており、物品をリストアップして管理するとともに、必要物品をもらいに訪れた被災者に分配する作業もしていた。

次に、軍施設内に設置されている災害対策本部(災対本部)の視察を行った。ここでは、身分の確認が行われ写真撮影は禁止された。この場所は、被害で亡くなった人たちの国葬を行った場所でもある。災対本部は、体育館にあり、I R C Sはもちろん軍、警察、消防、行政などのほかに、地震学者や教育委員会などのブースが並んでいた。地震学者たちは、地震の観測を続けており、今後の地質的变化についての予測をし、情報を皆に伝え

ることによって、安心感を与えているということであった。また、学校などで、地震がなぜ起こるのか、どのように避難すればよいのかなどの教育をすることによって、子供たちの不安解消に一役買うことが彼らの心理社会的支援と考えているようだった。

災対本部の I R C S のブースでは、emergency managerのFabio Torretta氏の説明を受けた。死者数は、時間とともに増えたようで、事前のインターネット上の死者よりは増えており、5月10日現在297名（293名は圧死、4名は救出後死亡）とのことだった。避難している人は、約63,000人いるが、そのうちの約32,000人は、ホテル等の施設に避難しており、約31,000人がテント生活をしているとのことであった。テントは約6,000張り提供しているそうである。これらの避難者のうちの54%は家屋の被害が少なく帰宅可能であるが、余震が続いており、恐怖のために帰りがらないとのことであった。被害を受けた家屋の22%は、修理して入居が可能、24%は修理不能で再建が必要ということであった。

その後、コレマッジオ避難所（campo di colle maggio）の内部に入り、視察をした。そこには診療所もあったが、そのスタッフとは別に心理社会的支援の担当者として1名の精神科医と2名のボランティアが巡回して来ていた。このボランティアは、イタリア各地から集まり、1週間交代で各避難所を巡回して個別や集団での相談や心理社会的支援をしているとのことであった。この巡回は、当初1キャンプにつき週に半日の活動だったが、需要が多く1日の活動に時間が延長されたそうである。ただ、在宅の被災者には対応できていないということであった。スタッフへの心理社会的支援としては、個別の相談にに応じているそうである。正式なデブリーフィングやデフュージングは行っていないが、多職種合同のミーティングは頻繁に行って対応しているという。被災者のPTSDについては、余震が続いているため診断はできないということであった。イタリアでは、病院のそばにはキリスト教の教会を置くことになっているようで、コレマッジオ避難所にも教会のテントが設置されていた。

12日には、サン・グレゴリオ避難所（Campo di San Gregorio）の内部を視察した。ここには約400人が避難していたが、被災者たちの家の前の広場を利用して作った避難所のため、被災者たち

は、毎日崩壊した我が家を見て生活しなければならないという問題を抱えていた。この避難所は警察による警備が厳しく、I R C Sのスタッフが同行していても入口のゲートでパスポートを預けなければならない、写真撮影も制限された。

ここでは、「ドクトル・クラウン」（図4）というピエロあるいはパッチ・アダムスのような格好をしたボランティアが心理社会的支援をしていた。



図4 ドクトル・クラウン

2004年からI R C Sが災害ボランティアの一環として研修をはじめたそうで、全国各地から複数の「ドクトル・クラウン」が参加していた。彼らは、ドクトルと名前が付いていても医師ではなく、笑いやユーモアを用いて心理社会的支援を行うボランティアである。「ドクトル・クラウン」の誕生には、被災者には「温かい食事」と「屋根のある部屋」の他にプラスアルファとして「リラックス」が必要だとの認識から生まれたという経緯があるそうである。彼らは、けっしてふざけているわけではないと強調していた。今回は本格的な活動としては初めてということであった。癒しの対象は、子供から大人までの被災者とスタッフも含まれているそうである。15人のチームで、1週間交代で活動しているそうである。

食堂では、子どもが配膳の手伝いをしていた。これも心理社会的支援の一環だそうである。すなわち、被災し多くのものを喪失して無力感を感じている子どもは、手伝いをすることによって他人の役に立つ存在としての自分を認識することになり、それはエンパワーされることになるということであった。

また、食堂のそばには、花壇が被災者たちによって作られ、手入れがされていた。きれいな花を

眺めて心を癒すとともに、植物の成長を眺めることは、自分たちにも将来があるという認識につながる心理社会的支援であるということであった。

次に、被害の大きかった場所の集団住宅を I R C S のスタッフとともに視察した。そこでは、1階部分がつぶれ、2階が地面についている建物や壁がはがれ、家の内部が丸見えの状態になった住宅が数多く見られた。その後、I R C S のラクイラ支部の責任者である Luigi Sigismondi 氏と面会し説明を受けた。ボランティアでベースキャンプに寝泊まりして活動しているユースのメンバーは、学生のみならず医師や心理学者もいるとのことであった。若い人たちと専門家とが連携して行っているが、専門家の数が多いわけではないので、限界もあると話していた。心理社会的支援活動については、まだ5～6年の歴史で新しいものであると認めていた。しかしながら、I R C S のボランティアの研修には、雪上救護、水難救護に加え心理社会的支援のコースが設置されているとのことである。

他国の赤十字社が今回の地震で I R C S を訪問したことはなく、ジュネーブの I F R C の調査を除けば、私たちが初めてだということであった。I F R C は I R C S がよく機能していると評価したということであった。

その後、ラクイラ大学を訪問し、精神科チームが行っている「スマイル・プロジェクト」を視察しようとしたが、セッションはちょうど終了したところであった。「スマイル・プロジェクト」は、集団心理療法と心理教育を組み合わせたような活動のようであった。ラクイラ大学医学部付属病院も被害にあい機能しなくなったために、テントをたてての活動であった。精神科チームが行っている精神的健康調査は、質問紙（GHQやIES-Rなど）を使ったもので日本をはじめ世界的にもよく行われている調査方法であった。

## V. 考察

心理社会的支援とは、P S P の考え方に従い、ストレスの低減をするさまざまな活動であると考えられると、イタリアではさまざまな工夫がされており、日本でも見習うべき点は多いように思える。

今回の調査で、まず目を引いたのは、シビルプロテクションが配布したという統一規格の青いテントである。このテントで避難所を形成していた。日本では、避難所は学校の体育館など広い屋内を利用することが多い。それは、管理しやすいとい

う利点を持つ一方で、避難者にとってはプライバシーがないことによるストレスが大きい。また、余震が続く場合には、その避難所自体の崩壊の危険性もある。テント村による避難所というのは、天候や気候によっては適さないこともあろうが、プライバシーの保護という点では優れていると考えられる。今後日本の避難所についての改良を考える際の参考にすべきであろう。

次に、食事の供給、トイレ、シャワールームなどの設備などを整えることで、避難所にいてもできるだけ日常に近い生活を送れるように配慮している点は、優れていると考えられる。食事は、本格的な厨房で、シェフによって作られボランティアによって配達されるが、その際に温かいものは、温度が下がらない容器に入れるなどの工夫がされていた。缶入りのワインなども用意されていたが、イタリアの食生活を考えると、それも心理社会的支援といえるであろう。トイレは、日本でも仮設のものがすぐに設置されるが、水洗トイレに慣れた人にとっては、汲み取り式トイレは抵抗があるものである。しかし、イタリアの仮設トイレは、他人の排泄物を目にすることなく使用できるという点で優れていた。シャワールームの設置などは、避難所ごとに設置されているようであり、清潔の保持だけでなく、気分的にも快適に過ごせる配慮がなされていた。特に、救護者のベースキャンプには、シャワー用の車両があり、男女同時に複数で使用できるようになっていたのは注目に値する。新潟中越地震に J R C S から「こころのケア」要員として派遣された人たちは、5日間風呂に入れなかった。非常時とはいえストレスであったと考えられる。日本では、自衛隊が風呂を用意してくれるが、避難者用であり、救護者は使用しにくい面がある。今後は日本でも救護者用のシャワールームなどの設備を救護者のための心理社会的支援として準備する必要があるだろう。

心理社会的支援の根本は、安心と安全を提供することであると考えられる。イタリアでは、避難所での警備を厳しくする、教会を置く、地震学者達が情報提供をする、ボランティアが定期的に避難所を巡回する、I R C S の車両は赤十字のマークがついていなくてもナンバープレートを見ればわかるようになっていてなど安心感や安全感を提供しているようであった。

子ども達をはじめ避難者達に避難所での仕事を手伝ってもらおうということは、日本では少ないが、

被災者達の自己効力感を高めるのに役立ち、エンパワーメントになるという指摘は傾聴に値すると考える。また、花などの植物を植えることは成長を見守り、被災者自身の将来を考えることに役立つという指摘も新鮮なものである。

「ドクトル・クラウン」、「スマイル・プロジェクト」、「瞬間移動装置」などは被災者、救援者問わずにユーモアを活用した心理社会的支援と考えられるが、こういうものを生み出す文化の違いというものも感じる。困難にあっても笑いやユーモアを取り入れることは心理社会的支援なりうるだろうが、日本ですべての人に受け入れられるかには多少疑問が残る。ドクトル・クラウンが「ふざけているわけではない」「笑いが有効であるという研究からスタートしている」と言っているように、イタリアでも議論はあったのであろう。

I R C Sの心理社会的支援のボランティア達は、I F R CのP S Pについての知識はないようであったが、基本的に彼らの行っている心理社会的支援は、P S Pと矛盾するものではなかった。I R C Sでは、すでにボランティアに対する心理社会的支援の研修が始まっており、小さな事件等では実施されているそうである。このことは、日本でもまだ緒についたばかりであるので、イタリアの方が先進的であると言えるかもしれない。

J R C Sでは行っていないことであるが、I R C Sでは、支援物資（衣類、飲料水、食料、日用雑貨など）の寄付を受け付けており、それを管理し必要な避難者に配っていた。これは、被災者が必要とするものを直接目で見て入手できるという点で有益であると考えられる。ただし、新品のものを大量に寄付してもらうためには、個人的な物資の寄付ではなく企業等からの寄付のかたちになるのが望ましいと思われる。

ラクイラ大学で行っている精神的健康調査では、G H QやI E S - Rなど国際的に使用されている質問紙法が使用されており、データがまとめれば、国際比較が可能になると考えられる。

イタリアは、経済的に恵まれており、災害時の準備はハード面でもソフト面でも十分に災害に対応できているように見受けられた。心理社会的支援は、心理的支援だけではない。ストレスの低減、日常生活に近づけるための支援と考えると、災害大国日本の心理社会的支援の参考になるものがいくつか見えてきたように思える。

## VI. 謝辞

私たちを受け入れてくれたイタリア赤十字社にお礼を申し上げる。特に、Arianna Marchetti博士の現地でのコーディネーターがなければ、短時間で有益な情報は得られなかった。また、Luigi Sigismondi氏、Roberto Baldessarelli氏、Fabio Torretta氏の許可がなければ、イタリア赤十字社のベースキャンプや軍施設内に設置された災対本部での情報収集はできなかった。また、ラクイラ大学医学部のRoco Pollice博士、Rita Roncone博士には、ラクイラ大学医学部の精神科チームが行っている活動について説明していただき意見交換ができた。お礼を申し上げたい。今回の視察調査を可能にしてくれたのは、イタリア語の通訳兼コーディネーターを引き受けてくれたクレモナ在住の長野太郎氏に負うところが大きい。彼は、トリノオリンピックの時にJ O C視察団のコーディネーターと通訳を務めた経験とイタリア文化を知り尽くした知識をフルに活用し、イタリアでの調査を円滑に進めてくれた。以上の方々には、ここにお名前をあげて感謝の意を表したい。

## VII. 引用・参考文献

- 1) 防災システム研究所：ラクイラ地震,  
<http://www.bo-sai.co.jp/italyjisin.html>
- 2) IFRC : Italy's worst Quake in nearly 30 years strikes city of L'Aquila,  
<http://www.ifrc.org/Docs/News/09/09040601/i>
- 3) IFRC : Italian Red Cross disaster response continues,  
<http://www.ifrc.org/docs/news/09/09040902/>
- 4) IFRC : Italy: Sheltering the homeless of Abruzzo an urgent challenge,  
<http://www.ifrc.org/docs/news/09/09040701/>
- 5) IFRC : Italian Red Cross helps rebuild lives after earthquake,  
<http://www.ifrc.org/docs/news/09/09042801/>
- 6) Wikipedia : ラクイラ,  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%AF%E3%82%A4%E3%83%A9>
- 7) Wikipedia : ラクイラ地震,  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%AF%E3%82%A4%E3%83%A9%E5%9C%B0%E9%9C%87>